

L : M浦、H口（会員外 : S 治）

上信越自動車道を走って碓氷軽井沢インターが近づくと今回目指す高岩の岩峰が目に見え込んで来る。いつもここを通る度に気になる岩峰である。インターを下りた所で車を止め、尖塔のように聳え立つ雄岳、雌岳を見上げると、登りたくて来たのに本当に登れるのかなと思ってしまう。まあ、相棒があややなので何とかできるだろうし、何とかならなくてもそれなりに楽しめるだろう。待ち合わせをしている西登山口へ車を回すと自転車に乗ってS 治さんがやって来た。

9時に西登山口を出発。本来は車道を回り込んで東登山口から登山道に入るのだが、あややはその間をショートカットしようと土手に取り付いた。もちろん路など無いのだがGPSで方向を定めて歩いて行くと10分ちょっとで「登山道に出ました」と声を上げた。距離にして1kmほどの短縮である。

そのまま谷筋を雄岳と雌岳のコルへと上がって行く。乾いた斜面と落ち葉で滑りやすいが目標は見えている。9:30にはコルに着いた。

上がって来た方向から右に雄岳、左に雌岳があるが、雄岳の方は垂直のチムニーを上がって行かねばならないのでロープワークの装備が必要である。

「じゃあそっちはお二人に任せて私はどっかでスケッチでもしているよ」とS 治さんは雌岳の方へ向かって行った。あややと僕はハーネスを着けヘルメットを被る。

「よし、行こうか」と気合を入れて雄岳へ向かった。

岩峰下をトラバースしてチムニーの下に出た。30mの鎖が垂直に垂れ下がっている。あややが両手を伸ばして鎖を握り壁に足を掛けるが

「うわっ、何だこれっ！」

鎖が長くて安定しないのと岩溝が狭く背中のザックが引っ掛かって苦戦している。それでも一段目のテラスまで上がり「いいよー」と声が掛かった。



できるだけ鎖が動かないように力を加える。壁は礫岩のようにボコボコして足場は豊富だ。左右に振られないように気を付けてテラスまで上がった。

同じように二段目のテラスまで上がり、三段目のテラスへあややが上がり始めたが「こりゃだめだ」と言って引き返して来た。そして上目遣いで「先行く？」

交代して取り掛かるとこれまでより垂直で足場が掛かりにくいのかな。何とか体を引き上げテラスまで上がり切った。

「さすがです」というおだてに続いて「ロープで確保して」のリクエストが入った。三段目のテラスまで上がるとそこで鎖場は終わる。

「これ、下りはロープダウンの方が絶対楽だよな。」

10:15、狭い雄岳の山頂に立った。浅間山が目に入り妙義山や五輪岩が眺められる。

「いやあ、来ちゃったね」と感慨深くはあったが、山頂が狭いので長居はできず5分ちょっとで下り始めた。

鎖場は懸垂下降で下ることにした。1ピッチ下りた所で支点を取り直し、まとめたロープをあややが声高らかに「ロープダウン！」と高く放り投げると岩場の木立に絡んでしまった。いちびりさんやねえ。いったんロープを手繰り上げ今度は静かにダウンさせた。ちょうど2ピッチで下りる事ができた。

コルまで戻ると雌岳方面は陽に照らされて明るくなっている。雌岳の痩せた P1 に上がるとインターチェンジのループが見下ろせた。先週行った荒船山は裏返したサーフボードのようだ。向かいに見える雄岳岩峰には洞穴らしき穴が二つ開いていて「鼻の穴みたいだな」とあややが言った。

雌岳 P2 への取り付けは見るからに危なそうで行こうとは思わない。その先の P3 には岩の隙間があってその間から正面に浅間山が見えるのが何とも絵になる。

S 治さんは P3 の先に居た。そこから浅間山を見渡す景色が素晴らしく、水彩画を1枚描き終えていた。

「お待たせしてた S 治さんには悪いですけど我々もここで一本取らせてもらって」とあややがクネクネしながら言ってザックを下ろした。絵に描きたくするような景色を前にして食べる行動食はひときわ美味しかった。

雌岳からの下山路の途中、登山道を外れた所に展望台がある。雄岳から切れ落ちた崖が見えたがそこが展望台のようだ。行くまでの溶岩の痩せ尾根は両側が切れ落ちてスリル満点だ。それでもそこまで辿り着くと期待に違わないパノラマが待っていた。浅間山から榛名山までの地平線からここまでがすべて錦秋のジオラマとなっている。高速を走っている車に手を振ってみる。すこぶる気持ちがいい。来た甲斐があったというものだ。



登山道に戻ると下りは急斜面。両手を使いたいので今回はストック無しで正解だ。傾斜が一段落すると登山道が消されるほど落ち葉がフカフカの中を歩いて行く。

紅葉した木々の木漏れ日の散歩道が続いて、道路脇に停めたおむすびみtainな形のあややの車が見え 12:20、西登山口まで戻って来た。ザックを下ろすと

「これから上信越道を通る度に思い出すね」とあややが言った。今まで高岩に抱いていた“憧れ”が“達成”に変わったのだ。

S 治さんの自転車を畳んで車に詰め込み、S 治さん御用達のカフェへと向かった。満たされた気持ちで軽井沢の午後のひと時を楽しんだ。

(H口 記)